

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 フランツ・カフカ『変身』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



第34回のツイキャス読書会の課題図書は、フランツ・カフカの『変身』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『変身』感想文

課題図書の変身を読みはじめてすぐのこと、朝に目を覚ますと、毒虫にはなっていないのですが、首を寝違えたようで起き上がったり、首を少し曲げるだけでも激痛が走り、思うままに身体が動かないことに嫌気が差しました。

今では良くなったのですが、日々当たり前のように動いていた身体が思うように動かなくなるのは本当に困ったことです。

変身の主人公のグレゴール・ザムザは複数の夢の反乱の果てに目を醒ますと、寝台の中で自分がばけもののようなウンゲツィーファー(生け贄にできないほど汚れた動物或いは虫)姿を変えてしまっていることに気がついた。(多和田葉子：訳 集英社ポケットマスターピース版)

もはや自分の身体ですらなくなっていたザムザですが、毒虫になった原因や、どうすれば治るのかなど、深く考えもせず、虫の姿のまま出勤しようとする姿勢というのは、無理しがちな現代人の我々も当てはまるのではないかと思いました。

4時に目覚ましをかけていても寝てしまっていたのは、毒虫になっていたから起きられなかったのか？

本当は自分の為より家族の為に働かなきゃいけないことや出張、早起きをする仕事に嫌気をさして寝坊という現実逃避で毒虫になったのかわかりませんが、疲労困憊気味のザムザ君を休ませて欲しいと思いました。

トドメを指すように、部長(支配人)が、7時15分には自宅に来るとか追い込みも凄まじい。

会社に借金しているとはいえ、普通、休んだ会社員の家までいかないですよ。

こんな取り立てのような会社でも、きちんと忠誠心を誓っているザムザ君は社畜としての鏡だと思いました。

やはり何度読んでも、ザムザが天井にはいりついて楽しんでいるシーンはいいですね。

村上春樹さんが『恋しくて』というアンソロジーで『恋するザムザ』という変身のその後を描いた作品があるので気になる方は読んでみて下さい。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 『変身』 感想文

グレゴールは虫になってしまったけれど、虫にならなくても家族の中で異質な存在だったように思いました。

家族を支える為にやりたくない仕事も頑張ってやっていて、住むところもグレゴールが決めて、妹の将来の為に色々考えていたり、まるで家長のような感じだと思いました。

家族のために働くという事は親孝行な事だと思うし、その事に関しては素晴らしいと思うけれど、やり過ぎてる感じがしました。

そのために、家族の可能性を消してしまっていたのかもしれない。

妹もヴァイオリンが上手だけれど無理して学校に行かせたところで、もし才能がないという事が分かったら苦しんだかもしれない。

妹のグレーテにとってもグレゴールの存在が負担になっていたという部分もあったように思いました。

だからといって、グレゴールが両親や妹から嫌われては、いなかったように感じました。もし、虫になっても以前のグレゴールのように人間の感情のままでいられて、会話が出来れば虫のままでも少しは幸せに暮らせたのかなと。人間らしい考えがだんだん無くなってきた為にグレーテも決断をしたのだと思う。

息を吐いて一人で死んでしまったグレゴールは、可哀相に思いますが、グレゴールに、とっっても家族から解放され、家族にとっってもグレゴールから解放され自分たちの身の丈に合った幸せを見つけられると思うので良かったのかな？と思いました。

グレゴールが、虫にならなければ両親や妹のグレーテにとっての本当の幸せに気づけなかったのは悲しいと思いましたが、両親とグレーテの明るい未来が想像できて少しスッキリとした気持ちで読み終わりました。

(おわり)

## ザムザは悪か

ある朝、目覚めたらばかでかい毒虫に変わっていた主人公が、かつて主な生計者であった過去からは考えられないほど家族や周りの人から疎まれ、息を引き取り、それに引き換え家族自らが生計を立てるという物語。

「なんて、ストレスのかさむ仕事を選んでしまったんだろう！ 明けても暮れても出張、また出張」 (p.8)

虫の姿を発見した主人公は、ストレスで自分がおかしくなっているという判断を下す。その後も仕事に間に合わないだの、誰かが会社から様子をうかがいに來るだの、虫になった事実よりも、仕事に行けないことや会社からの非難、家の借金を返せなくなることを恐れている。

どうして虫になったのか。

主人公が虫になったことを受け入れたのは、家族や周りの人が自分を見る目や、好きだったミルクやパンよりも腐りかけの野菜やチーズを好んで食べるようになってからのようだ。しかし、何故自分が虫になったのか、虫にならなければいけなかったのかは問われない。この姿になった今、どうしていくかが問われている。

自分が何者になるかなどわからない。明日会社から解雇されるかもしれないし、恋人から別れを告げられるかもしれない。その時に、どうしてそうなったのか、何が悪かったのかに固執しても仕方ない。現状を踏まえて、さあこれからどうして生きていくか、楽しみを見つけていくかが問われている気がする。

ザムザ家の家族は前向きである。

主な収入源であったグレゴールの稼ぎがなくなったとき、家族各々は働き始めるが悲観的ではない。また、グレゴールに対して感謝や非難もない。

それに比べると、グレゴールこそ家族に固執しているようにも見える。自分がやらなければと焦って問題を背負い込み過ぎている。家族の借金を全て自分が肩代わりしようとしている。そうすることで家族は怠けグレゴールに頼り切る。彼が虫になり死ぬことは、最終的に家族には幸をもたらす。

休みを取り、家族三人で出かける電車の中での会話は、前途洋洋である。

(おわり)

# 変身 — Die Verwandlung (ディー・フェアヴァンドルング)

## フランツ・カフカ 読書感想文

グレゴール・ザムザの絶望はいつからはじめていたのだろう。ある朝突然、ベッドの上で毒虫になり仰向けであった。確認してみたが夢ではない。家の借金を1人で背負い、大真面目に働いていたグレゴールが一体なにをしかして毒虫になってしまったのか、その疑問を問わないまま悲劇が少しずつ深刻になってゆく。理不尽だ、不条理だといっても、ある日の偶然が引き起こしたのだからそれは誰にも予断できないこと。選んだ仕事が悪かったのだろうか、寝不足続きだったからだろうか、あてのない理由を探してみる。

時間の経過といくつかの事件、他人の関与。それらのせいで家族として信頼していたはずの関係が通じ合えないものとなってゆく様が、暗い部屋の中で切なく彼自身の言葉として吐露される。そしてグレゴールが常に鳥瞰している心の描写は、悲劇であるが喜劇に近い。

「これを処分するしかないわ」と妹は言う。夢も希望も持てず、最愛の妹にそっぽを向かれた限り生きてゆく理由がなくなった。「あいつが言葉さえわかってくればな」という父の言葉は、現実から目をそらしてきたこと、無関心であったことの証明であり、父としての立場も愛も感じられずただただ哀しい。グレゴールは自らの絶望の果て、死に向かった。

いずれ人はみな死んでゆくのだし、偶然の悲劇が起きても起きなくてもいま抱えているわたしの（小さな）絶望と向き合い、家族や他者との関係でどこまで優しくなれるのか、自分の限界をも考えさせられた。毒虫くんと呼びかけた老婆のように冷静に観察し、「やれやれ」とため息はつくと思うけれど、カフカの映じた世界にファンタジーではなくリアルな今を写し、明日起きうる偶然の悲劇に心の準備はできているのかと自らを問うた。

(おわり)

## 『変身』 読書感想文

妹はグレゴールの世話をする事に熱中し、状況をより恐ろしくして、もっと尽くせるようにしたいという心理が働いていた。その為に断行してしまった片付けの最中、グレゴールは母親を気絶させてしまいます。帰宅した父親に事のあらましを妹が伝え、父親はグレゴールが理由も無く暴れたと認識します。父親の気持ちをなだめる為、すぐに部屋に戻る意向があるという誠意を見せますが、そこにいるのは過去のだらしのない父親ではなく、仕事を始め、ピンッと制服を着て生き生きとした注意深げな黒目をした別人だった。父親は居間に入るなり、怒りと喜びのないまぜになったような調子で叫び、そばにあたりんごを狙いも定めず、ポーンっ、ポーンっとして息子に向かって放り投げ、その一つが背中にめりこみます。下着姿の母親が飛び出してきて、放り投げるのを止める為に父親に抱きつき、ぴったりひとつに重なり、グレゴールの生命は助かります。

傷を負い、自分が家族の役には立たずむしろ厄介者だと、やっと悟る事が出来たグレゴールは、感動と愛情を込めて家族達のことを回想しつつ、息絶えます。一方家族達は、亡骸を埋葬するでもなく、今までついで訪ねあうことすらなかった、三人三様の勤め口が恵まれている事などがわかり、懸念事はグレゴールが今まで住まわせてくれていた豪華な家だけだという事で、引っ越し話しに花を咲かせ、未来に希望を抱いて、物語は終わります。

変身後、グレゴールは妹の為に自分の姿が、どの角度から見えないように4時間もかけて麻のシーツで工夫をしたり、考えるのは家族の生活の心配事、なのに行動が全て裏目に出て家族達を困らせてしまいます。父親の「言葉さえわかってくればな」は、悲し過ぎるセリフです。自分を殺し嫌々他者に尽くしても、誰にもよくない、という事なのではないでしょうか。この先グレゴールはタブーとなり家族団欒時、話題にのぼる事は断じて無いのである！

(おわり)

## 『想定外』

グレゴールは、朝起きて、突然自分が毒虫に変わっていることに気がついた。自分の意志とは関係なく身体が姿を変えたのだ。虫になったのはグレゴールにとってはもちろんのこと、家族にとっても想定外の出来事だった。

想定外の出来事との遭遇は、人間が最も恐れるものの一つではないかと思う。この物語を、私はひきこもりの人とその家族をイメージして読んだ。現代日本でこの小説がベストセラーになっている背景に、私たちの日常でもはやひきこもりが人ごとではないことが挙げられるのではないか。ひきこもりはいざ自分に降りかかると「まさか自分が…」となる典型ではないかと思う。もし私や家族がひきこもりになったら、お互いにどんな精神作用が及ぶのか。どんな道を歩むのか。

グレゴールが毒虫になったことの家族のダメージは、単に生計中心者を失っただけではない。気色の悪い虫となって自宅に寄生している事を受容の苦しみ。周囲からの偏見。それらがさらに追い討ちをかけ、一家は二重三重の辛苦を抱えることになる。

しかし、ここからのグレゴールの家族の変化が、私には「想定外」だった。最終的な頼みの綱だった家賃収入さえも望めなくなった段階で、家族は初めてメイドや入居者らのご機嫌伺いを断ち切り、自立する決心をしたのだ。そしてその時点でグレゴールは息絶えた。

グレゴールの変態は、まるで家族に残存能力を気付かせる仕掛けだ。一家はグレゴールの収入をあてにして生活していた時に比べ、生氣に満ちている。家族は見事に「変身」した。自らの意志で状況を変えようとしたのだ。想定外の出来事に対して家族が本来持っている力を発揮できたことは本当に良かったと思う。

しかし、グレゴール本人の課題は残されたままだ。作中では息絶えてしまったが、現実にはひきこもっている人は毒虫になるわけでも消えて無くなるわけでもない。だから、読み手一人ひとりがこの物語の続編を自分なりに編み上げていく事になる。もし、グレゴールが単に病気など回復の見込みがあったら家族は自立しなかったかも知れない。グレゴールの場合もともと経済的に自立していたが、ひきこもっている人の場合、まず自分が精神的に経済的に自立する事が先決だろう。しかしそれがとても困難になりつつある情勢なのだから、一筋縄ではいかない。続編を、どうしたものか。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『 自分ファースト 』

グレゴールに対して、違和感から始まる。毒虫に変身したことではなく、なぜ毒虫に変身した自分に動揺しないのか。「グレゴール、後ろ！後ろ！」と蹴っ飛ばしてやりたいくらい冷静に勤め人としての心配しかしない。仰向けになって動けない体であっても、仕事のストレスを思い浮かべるのが先だ。それには、もちろん理由があった。ほぼ「死に体」の家族を養わなくてはならないからだ。しかし、毒虫になればそれは叶わない。彼にとっては、家族に必要とされる存在意義が自らのアイデンティティを凌駕しているのだ。ここまでだと家族思いの息子で、利他的な立派な人間とされるだろう。今風の言い方にすれば「家族ファースト」だ。しかし、私はそれに対して新たな違和感を覚えてしまう。

それは死に体と化していた家族が、グレゴールが毒虫になったことで再生していくからだ。家族が自立して生きていく道を指し示し、それまでの援助なら本当に家族のためであろう。人間はどうしても「楽」に流れる。グレゴールのやり方だと家族は、ただ墮ちるだけだ。

グレゴールにすれば、自分がいなければ立ち行かない家族は、自分の存在意義を証明する証だった。死に体の家族じゃなきゃだめだったのだ。見た目は家族ファーストでも、実体は屈折した「自分ファースト」だったグレゴール。忌み嫌われる毒虫に変身したのは、家族が再生するためのグレゴールの最後の家族孝行だったのかもしれない。

毒虫になっても世話をしてくれた妹から拒絶された際、息を引き取ったグレゴール。それに呼応するように母も「死んでるのかしらね」とほっとしてしまう。最初から毒虫を息子扱いしていなかった父はもちろん、家族との絆が消えたのだ。そんなグレゴールが最後に回想したのが、家族への感動と愛情だったことを想うと切ない。

家族で散策に出かけるくらい再生したザムザ夫妻とグレーテだが、人間は慣れる動物だ。最初はグレゴールに感謝していたが、その内にその気持ちも薄れていった。グレゴールが毒虫になった理由を自らで理解できないと、この家族から第二の毒虫が出るかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



## 『毒虫現象とホロコースト』

事業に失敗して、父親は、ボケたふりをし、母親は喘息を装い、妹は女子高生という身分に甘え、それぞれ無力感をまるだしにして生きていた。

グレゴールがクソ真面目で責任感の強い性格であるのをいいことに、家族は、一切を彼の気合いにおまかせしたのだ。彼も、ヒロイズムから、五年間も、このいびつな共依存状態に耐えた。一家の家長に昇格したのがまんざらでもなかったのか、必要以上にイキった。

しかし、残念なことに、彼の熱心と誠意をしても、傾くザムザ家の家運を扶翼できなかった。

グレゴールは、自由を奪われた営業マンだった。歩合給なので数字に追われ、雇用主に借金があるせいか、会社では、着服や不正を疑われ、監視される奴隷のような身であった。

大黒柱としての矜持、逃げ場のない仕事の重圧と、将来への不安、「俺の青春を返せ！ ふざけるな！」と感じても当然の怒りなど、モロモロを、自己欺瞞によってねじ伏せた結果、彼の実存には、質的跳躍が巻き起こった。

あろうことか、彼は、気色悪い毒虫に、変身してしまったのだ。

『健康な人は誰でも、多少とも、愛する者の死を期待するものだ』とは、『異邦人』のムルソーの恐るべき格言である。

ザムザ一家は、変身する前から、ずっとグレゴールの死を期待していたフシがある。サドマゾ的共依存関係によって彼の自由を奪うことで、間接的に毒虫（これ）への変身を促していた。

皮肉なことに、毒虫となったグレゴールは、自分には不安を感じていない。

なぜなら不安は、人間のものであり、毒虫のものではないから。

彼は、徐々に、人間としての尊厳を失い、己に満ち足りて、天井を這いまわった。

社会も、家族も、そして、悲しいことに、グレゴール自身さえも、彼の自由を食い尽くしたのだ。人間の実存の変身の果てにある毒虫の死は、人間の死ではない。ゆえに、毒虫には墓もなく、その死を前にして、人間には罪悪感もわからない。

人間を毒虫（これ）に没落させる現象の量的飛躍にこそ、ホロコーストの核心がある。

（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)